ルーブリックとは

中部大学　　大学教育研究センター客員教授
立命館大学　教育・学修支援センター長・教授
沖　裕貴

2012 年、中央教育審議会から提起された答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では、『成熟社会において学生に求められる能力をどのようなプログラムで育成するか(ディプロマ・ポリシー）を明示し、その方針に従ったプログラム全体の中で個々の授業科目は能力育成のどの部分を担うかを担当教員が認識し、他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的に教育を展開すること（カリキュラム・ポリシー)、その成果をプログラム共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）に則って評価し、その結果をプログラムの改善・進化につなげるという改革サイクルが回る構造を定着させることが必要である』と謳われています。いわゆる 3 つのポリシーの確立、PDCA サイクルの回る内部質保証システムの構築と併せて、新たに「アセスメント・ポリシー」という言葉が提言されました。

アセスメント・ポリシーとは、簡単に言うならば、あるプログラム（カリキュラム）で学んだ学生が、最終的にその学部・学科のディプロマ・ポリシーを達成したかどうかを挙証することです。具体的には学修行動調査（学生調査）や学習到達度調査、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価（ルーブリック評価)、学修ポートフォリオなどが挙げられていますが、卒業時に学生がどのような知識、技能、態度を身につけたかを、ディプロマ・ポリシーに則って明らかにする手段であり、内部質保証システムにおける check として機能することが期待されているものです。図 1 において、ディプロマ・ポリシーとカリキュラムとの間の「有効性（学修成果の測定)」に相当します。

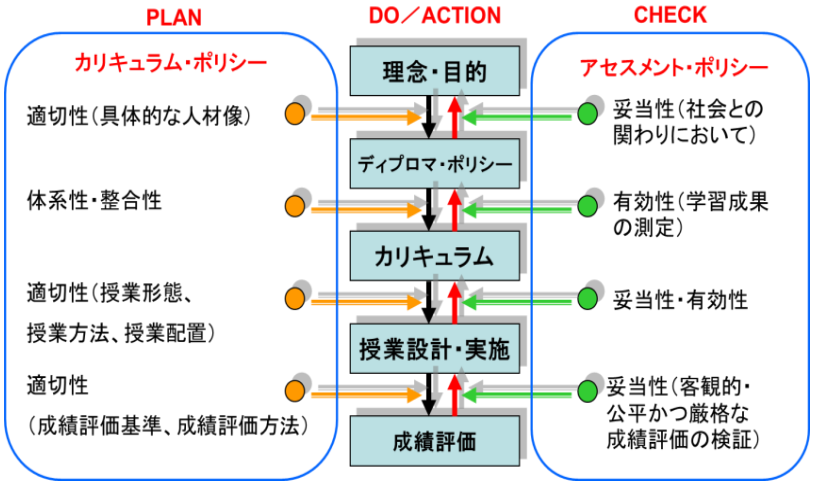

図 1　カリキュラム・ポリシーとアセスメント・ポリシーの関係

加えてルーブリックを用いたパフォーマンス評価（ルーブリック評価）や学修ポートフォリオは、上記プログラム（カリキュラム）の効果検証のみならず、個々の授業の総括的評価（成績評価）や形成的評価（学習者がさまざまな教育活動の途上で、その活動が所期の目的を達成しつつあるかどうか、どのような点で活動計画の修正が必要であるかを知るために行われる評価活動）にも積極的に活用が図られる必要性が指摘されています。図 1 における授業設計・実施と成績評価の間の「妥当性（客観的・公平かつ厳格な成績評価の検証)」がそれに相当します。そして、成績評価とは、授業の到達目標の達成度を最終的に客観的・公平かつ厳格に評価することを意味し、

それらの集大成としてディプロマ・ポリシーの達成が担保され、ひいては大学教育の質が保証されることになります。

表１　基本的なルーブリックの構造

	評価基準１	評価基準２	評価基準３	評価基準４
評価指標１	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点
評価指標２	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点
評価指標３	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点	特徴の記述と評点

表２　レポートの採点用ルーブリック例（沖）

	Poor (F)	Beginning (C)	Developing (B)	Accomplished (A)	Exemplary (A+)
取りあげたテーマに関して自らの考えを述べている。(23点満点)	◆問題意識(仮説)がなく、何を論じたいのか不明確である。 ◆他人の意見ばかりで自らの意見がほとんど述べられていない。 ◆レポート試験課題に関係のない論考である。 (0～5点)	◆問題意識(仮説)が不明確か、ありふれている。 ◆参照した一部の文献に引きずられた形で自らの主張をまとめている。 (6～10点)	◆問題意識(仮説)は述べられているが、反証が十分に調べられていない。 ◆結論がありふれたものになっている。 (11～15点)	◆自らの問題意識(仮説)に基づき、賛否両論の文献に当たり、自らの考えをまとめているが、結論の新規性、独自性あるいは説得力にやや難がある。 (16～20点)	◆興味深い切り口(仮説)で問題点を指摘し、十分な量の根拠と独自の思索に基づき結論を導いている。 (21～23点)
根拠に基づき、論理的な説明ができている(12点満点)。	◆情緒的な文章が続き、まったく論理的な説明ができていない。 (0点)	◆根拠を示していないところが一部あるか、根拠を示していても参照したデータや文章の意味を取り違えたり、論理的な説明ができていなかったりする。 (1～3点)	◆根拠を示しているが、読み手を納得させる書き方や結論となっていない。 (4～7点)	◆根拠に基づき、説得力ある説明がほぼできている。 (8～10点)	◆根拠と論理に基づき、正確かつ説得力のある説明ができている。 (11～12点)
引用文献、参考文献を巻末に明示し、自らの意見と区別している。(7点満点)	◆引用文献、参考文献がまったく明示されていないか、盗用、剽窃の可能性が高い。 (0点)	◆引用文献、参考文献が一部明示化されているが、どこまで自分の意見かが不明確な箇所が複数箇所見受けられる。 (3点)	◆引用した箇所に文献が(全部あるいは一部)明示化されているが、巻末に指定した方法で文献一覧が明示されていない、あるいは明示されていないものがある。 ◆文献一覧はあるが、文中の引用箇所に全部あるいは一部文献名が盛り込まれていない。 (5点)	◆引用文献、参考文献がしっかり明示化されており、指定した方法で文献一覧が明示されている。 (7点)	
誤字脱字がなく、段落も明確で、読みやすい文章となっている。また、レポートの体裁(要約、図表の番号、章・節の番号、分量)が適切である。(5点満点)	◆誤字脱字が3つ以上あるか、段落が区切られていない箇所が3箇所以上ある。 ◆レポートの体裁がまったく試験レポート執筆要領に沿っていない。 (0点)	◆誤字脱字が2つ以上あるか、段落が区切られていない箇所が2箇所以上ある。 ◆レポートの体裁が試験レポート執筆要領に一部沿っていないところがある。 (1点)	◆レポートの体裁は試験レポート執筆要領に沿っているが、誤字脱字が1つ以上あるか、段落が区切られていない箇所が1箇所以上ある。 (3点)	◆レポートの体裁が試験レポートの執筆要領に沿っていて、誤字脱字がなく、段落も明確で、読みやすい文章となっている。 (5点)	
「だ・である」体で統一して書かれている。(3点満点)	◆「だ・である」体で書かれていない箇所が3カ所以上ある。 (0点)	◆「だ・である」体で書かれていない箇所が1カ所以上ある。 (1点)		◆「だ・である」体で統一して書かれている。 (3点)	

ルーブリックを用いたパフォーマンス評価（ルーブリック評価）とは、評価指標（評価規準＝学習活動に応じたより具体的な到達目標）と、評価指標に即した評価基準（standards＝どの程度達成できればどの評点を与えるかの特徴の記述）のマトリクス（＝ルーブリック）で示される配点表を用いた成績評価方法です（表 1)。ルーブリックに記述された達成水準が明確になることにより、テスト法では困難な「思考・判断」や「関心・意欲・態度」、「技能・表現」の評価に向くとされ、フィギュア・スケートや芸術作品の評価などさまざまな分野で用いられるほか、大学では学生の示したパフォーマンス（論文や作品、演出等）をもとにして、レポートの評価（表 2)、学生の活動や作品・演出・実験の観察評価、面接の評価、プレゼンテーションやグループ活動の自己評価・相互評価、複数の教員で担当する初年次教育、オムニバス授業の評価などに有効だと

されています。なによりも教員にとって、評価時間を短縮し、成績評価の一貫性と公平性を確保し、学生の学習状況や修得状況を正確に把握し、授業改善に役立つ道具だと考えられています。

パフォーマンス評価（ルーブリック評価）に関しては、アメリカの AAC&U（全米カレッジ・大学協会）が、学部や学科のディプロマ・ポリシーの評価に利用可能な 15 個の VALUE Rubrics を公開し、広く利用を呼びかけています。これらは AAC&U のホームページから誰でも取得することができ、国内外の多くの大学が自らの組織や機関の評価に用いています（プログラム・ルーブリック）。

また、パフォーマンス評価（ルーブリック評価）のもう一つの利用方法である総括的評価（成績評価）や形成的評価に用いるルーブリックも、国内の多くの大学や機関で収集が進められ、共有化が図られています。これらは採点用ルーブリックと呼ばれ、レポートやプレゼンテーション、グループ学習の評価などに用いられています。

大学設置基準（第二十五条の二）には、『大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがつて適切に行うものとする』と書かれています。学修の成果に係る評価とは日頃の成績評価のことであり、そこで用いるルーブリックは事前に学生に対して公開され、その基準に従って厳正に評価されることが求められているわけです。

ルーブリックが公開されることで、「ルーブリックは何よりも学習者にとって学習活動や自己評価の指針としての役割」を果たし、学習者自身が学習における課題を発見し、自ら改善することへつながるのです。その意味で、ルーブリックは事前に公開するともに、評価後に返却することによってより高い学習効果を発揮することができます。

一方、ルーブリックは、特定の課題や活動に特化して開発されるというよりは、かなり汎用的に活用されることも知られています。多くの場合、ある専門科目のレポートの採点用ルーブリックを、まったく異なるディシプリンの専門科目のレポートの採点にも用いることが可能です。その意味で、自らの大学の採点用ルーブリックを収集し、共有を図ることは、新たにルーブリックを用いたパフォーマンス評価（ルーブリック評価）を試してみたいという教員にとって非常に便利であるばかりか、特定の課題や活動に特化した新たなルーブリックを開発するときにも大幅な時間短縮につながります。ただし、自らの科目の採点に適したルーブリックに落ち着くまで、最低 3 年間の微調整が必要だとも言われています。

最後にルーブリックを用いたパフォーマンス評価（ルーブリック評価）は、一部に「学生の留年や卒業率の低下をもたらす道具」という懸念があることも事実です。しかし、客観的、公平かつ厳格な評価は、これまで感覚的に捉えがちであった学生の変化（学力や意欲）を的確に把握し、迅速な対応（補習や科目分割、ピア・サポートの活用等の学習支援）を行うための貴重なデータと方法論を提供することにつながることになることを知っておくべきです。これこそが、アセスメント・ポリシーの神髄であり、内部質保証システムの構築された組織であることの証左となります。ルーブリックは、むしろその活用によって、学生の学びを促進し、より修了率や卒業率を上げるための教育プログラムの設計や改訂に役立つ道具であると認識する必要があるでしょう。

CU ルーブリックライブラリが、中部大学生の学習の指針となり、適切な教育情報をもとにした教育改善の促進につながることを切に期待しています。

（2016 年 2 月）